

「嘉元鐘」について

福田 以久生

はじめに

昭和五一年暮に、弘前大学教育学部の集中講義のためにはじめて弘前の地を訪れた折、虎尾教授の御案内で、長勝寺の「嘉元鐘」を見ることができた。お恥しい話だが、津軽の中世史に関して何ひとつ予備知識のなかった私は、この大鐘が鎌倉北条得宗とその被官たちと深い関わりをもつこと、これに関してすでに多くの先学がすぐれた見解を発表されていることすら知らず、講義を終って帰宅したのちに少しづつ気付くという有様であった。

五四年の夏に再訪した折には、その銘文の中に名を残す源光氏に関連した数基の石塔婆が現存していることを知っており、再び虎尾教授の好意に甘えて、中別所のリング畠の中の現物を一見することができた。この二つの遺物の存在は、中世史研究に志すものの一人としての私に深い感銘を植えたのである。しかし、何分にも遠隔の地のことであり、関連史料や文献の収集と考察に努力はしたものの、矢張り今一步十分明らかな知見を得たという段階に至ってはいないことを卒直に告白せざるを得ない。

今、研究会のもとに應じてこの一稿を草するに当り、この「嘉元鐘」に関する全面的な考察を展開することは、到底不可能であること

をあらかじめことわっておく。そして、筆著が見ることを得、参考にした文献をまず列挙し、それらの先学の敘述をあらためて検討した過程で生れた二三の疑問について、述べてみたいと思う。おそらく、地元の研究者間ではすでに常識となつて解決済みのこともあろうし、また、必読文献を見落していることもあるのではないかとおそれる。この点、卒直に御教示を賜れば、幸いこの上もない。

筆著が、この稿を草するに当って参考とした文献類は次の数点にすぎない（順序不同）。

- 1 豊田武氏「安東氏と北条氏」（『弘前大学国史研究』三〇号）
- 2 豊田武・遠藤巖・入間田宜夫三氏「東北地方における北条氏の所領」（東北大学『日本文化研究所報告』別巻第7集）
- 3 宮崎道生氏「青森県の歴史」（昭45年・山川出版社刊）「嘉元の鐘と南部牧」の章
- 4 宮崎道生氏「中世史上の安東氏」（同氏『青森県の歴史と文化』昭52年・津軽書房刊所収）
- 5 奥富敬之氏「得宗被官関係の一考察―曾我氏の場合」（昭38年『民衆史研究』（一）号）

6 伊藤一美氏「東国に於ける一武士団―北武蔵の安保氏について」

(昭47年『学習院史学』第九号)

7 弘前大学国史研究会編『青森県の歴史』(昭41年刊)

8 沼館愛三氏『津軽諸城の研究、草稿』(『みちのく双書』34集。

昭53年刊)

そして、肝心の「嘉元鐘」そのものについての典拠は

9 成田末五郎氏執筆、『青森の文化財』(昭42年青森県教育委員会

P 74)の「主要文化財、銅鐘一口」の項

10 小館衷三氏「弘前フィールドワーク資料」(昭51年8月)

を利用した。最後の10の資料は、『日本史教育研究会』(会長風間泰

男)の全国大会が会員虎尾俊哉・藤田則昭(聖愛女子高校教諭)氏ら

の尽力によって弘前の地で開催された折の巡検資料、会員小館氏

(弘前実業高校教諭)が作成された説明書であり、「嘉元鐘」の拓本を

載せている。

その他は行論の中で典拠を示すこととするが、主要なものは、以上の通りである。

一 円覚寺洪鐘との関連についての疑問

津軽地方が、北条氏得宗のいわゆる得宗領であったこと、得宗被官がその得宗領の各地の地頭代職に任命され在地していたこと、などの諸点については、前掲各論文の実証成果なり、すぐれた概説書(たとえば3・7)の敘述があるので、それに譲り、当面まず第一に、「銘文が同一」であり、「寄進の大檀那がともに崇演」であるところから

「円覚寺の鐘と姉妹鐘であるときれる」(3)という、その姉に当る円覚寺洪鐘との関連についてとりあげたい。

宮崎氏は前掲文献で、この青森県最古の梵鐘は「相模国で鑄造」されたとする(3)。この「姉妹鐘」という捉え方は、7論稿でも同様であるが、1論稿では、円覚寺の鐘と「ならぶもの」と述べるだけで、姉妹鐘という表現は使われていない。

仏教遺物に関して、美術史の面についても鑄工史の面についても全くの素人である筆者は、「姉妹鐘」という概念があるいは分類上の一つとしてあるのかないのか、あるとすればそれはどのような条件を共通して具備している場合に云えるのか、全く知らない。この点、識者の教示を得たいところである。ただ素人考えとして、たとえば古代の古墳などから出土する銅鐘に同窓鏡というような概念があることから類推すると、姉妹鐘という場合、同一の鑄型をもって造られたものとまでは云えないものの、すくなくとも同一工房に於いて製作されたものに「早呑みこみ」してしまうおそれのある表現のような不安を感じざるを得ない。

この二つの鐘には、いくつかの相違点がある。

(1) 総高・鐘身・口径・厚さその他、鐘自体の容姿は、円覚寺鐘の方が約二倍の大きさ・高さ・厚さとなっている。詳しい数値は今省略するが、円覚寺鐘については『鎌倉市史』考古編、『鎌倉の古鐘』の項を参照のこと。

(2) 鑄造年月日は共に不詳であるが、銘文の作製された日付は分る。たゞし、両者ともに陰刻であって、銘文作製の時点と銘刻の日付は別

箇である。そして、銘文の日付は、鎌倉の鐘が、正安三年（一三〇一）八月七日、長勝寺現存の鐘は嘉元四年（一三〇五）八月十五日である。因みに北条貞時の出家は、正安三年の八月廿三日であり（『武家年代記』）、円覚寺洪鐘はその寸前に銘が謹書されたことになる。『神奈川県々々史料』古代中世篇の（二）によれば、貞時発給の文書を編年順に載せたその配列から、円覚寺鐘銘は、出家以前の貞時の名の見える最後のものであることが分る。

③銘文の相異については、今更いうまでもない。「嘉元鐘」の銘文である「皇帝萬歳・重臣千秋・風調雨順・国泰民安」の四句は、円覚寺鐘の銘文のごく一部分であり、池ノ間、二区と四区に分けて刻されているにすぎない。「同一銘文」という表現は厳密さを欠いている。ただこの部分の文章が同一であることは否定し難い。

④銘文から知られるのであるが、製作者は、円覚寺鐘は「大工大和權守物部国光」、嘉元鐘は「大工 大夫入道」とあるところから、別人である。もっとも前者については、同じ鎌倉の建長寺の洪鐘（建長七年二月二十一日、檀那北条時頼）を铸造した物部重光を初代とする物部氏の三代目の棟梁で、弘安九年の千葉小網寺鐘、同十一年の相模高采寺鐘、正応五年の相模国分寺鐘、永仁元年横浜東漸寺鐘、正安三年八月九日横浜称名寺鐘の铸造に名を刻している。

なお因みに、円覚寺鐘は正安三年の八月七日に鑄上り、同十七日に「大鐘昇樓」の供養が盛大に行なわれたことが銘文から明らかである。とすると銘文の刻付は、その間僅か十日間足らずの内の某日ということになる。

陽刻の銘文をもつ銅鐘は、铸造開始以前に鑄型に銘文の逆型を作っておかねばならない。とすると銘文に日付があった場合、それは铸造の始期に近い。陰刻の場合は、先に触れたように、逆に铸造後となる。嘉元鐘の大工の大夫入道が、鎌倉の铸造技術の家系物部氏に連らるものかどうか、全く不明である。この点は、後述する「当寺住持」についての疑問とあわせて、果してこの鐘が、「相模国で作られた」（前掲三論著）と断定しうるか否かの問題にかかわってくる。

⑤先にあげた銘文中の同一文章の四句について、この四句が正に二つの鐘を铸造して祈願する意図を示していることは明らかであるが、円覚寺のそれは、二区と四区に二句ずつあり、しかも「籠字」（双鉤）であること、にもかかわらず「嘉元鐘」は冒頭に四句が普通の書体で陰刻されていることのちがいがあれることを指摘しておきたい。前者は銘文によれば、西潤子疊が、後者は春容徳熙が、「謹銘」したとある。銘文を撰じたものが、銅鐘そのものに刻字するのであろうか。これについては推測に近いが、「彫手」の人物を別に刻した骨蔵器の例（嘉元元年十一月、忍性舍利器記。『鎌倉市史』三、極楽寺文書。現在唐招提寺に所蔵され、大和竹林寺から出土した、と『神奈川県史資料編』に注されている）もあるので、別人であった可能性が強いといえるであらう。

以上が、二つの鐘についての知見である。果して「姉妹鐘」と云えるのかどうか、何らかの参考になれば幸いである。

二 铸造の動機

宮崎氏の先掲論著4は、「平山久夫氏の論文（筆者・末見）の「津輕安東氏を追って」に対する疑問点の提示と見解の表明が内容となっているが、その行論中に「（平山氏は）安倍季盛が津輕在地の諸豪族とならんで嘉元の鐘の鑄造を發意し、それに名を刻銘したとされている。筆者（宮崎氏）は、これは幕府側、貞時の発案であって、貞時によつて強力に推進された得宗專制化の一環をなすものと見たい。云々」と云われている。先行の概説書3では、動機については明言されていないが、「相模国で鑄造され」と述べている点から考えると（前提参照）、これが平山氏に対する上掲の反論となつたものと見られる。

この点を明確にする手がかりは直接的には何ひとつないのであるが、鐘の鑄造の時期を考へてみることも強ち無意味ではあるまい。すでに得宗專制化の過程の一事件として周知のことに属するが、前年嘉元三年の四月におこつた連署の左京権大夫北条時村の誅殺事件、そしてそれが貞時の「仰せに随つて」行なわれたとされたが実は六波羅探題北条宗方の陰謀であつたことが露顯して宗方が誅戮された五月の事件とは、全く無関係なのであるか。この事件の詳細は省略するが、「保曆間記」「武家年代記」などに拠れば、これは明らかに得宗專制化に対する北条一門の反撥と内訌、霸權争いであり、しかも、かなりの範圍の御内人（得宗被官人）が貞時側をはなれて宗方側に与同していることが知られる。とすれば、貞時（出家して崇演）が、得宗領を管理掌握する津輕周辺の地の御内人たちの結束をより強固とする為に寺院の造営乃至は洪鐘の鑄造を企画し、それへの参加をよびかけたと考えることは、それ程唐突ではなくなってくる。

勿論、東北地方の細かい中世史の進行の事実の中に、かえつて在地の側から中央權力への収斂を図らなければならないような構造的な変化、事件が現れていれば、話はさらに具體的となり、発願者を在地の何某と考えることもできよう。円覚寺の洪鐘は、おそらく、貞時自身の出家ということと無関係に鑄造されたものであるまい。「嘉元鐘」の場合、今の所「大檀那」の貞時自身の一身上の問題と結びつくような変化を示す史料は断片すらも見出し得ない。一年前の事件を短絡させるのは早計かも知れないが、鑄造の場所の当否はともあれ、動機については、宮崎氏の説を支持したい。

三 「当寺」と徳熙について

この問題に迫る手がかりは、銘文を「謹書」した「当寺住持伝法沙門徳熙」という人物である。「嘉元鐘」は、すくなくとも鑄造当時、徳熙が住持であつた「当寺」に寄せられた。では、その寺は何という寺であつたろうか。

得宗領の内に、北条氏と深い因縁をもつ寺院が多く建立され、なかには角田の伊具庄の斗藏寺の如く、正安年間に「平朝臣貞時」の安穩を祈るためのものとして沙弥貴妙が鋤鐘を寄進している例があることを指摘されたのは豊田氏であつた（前掲論文2）。

そして同氏はその行論中で、「得宗領であつた南津輕田舎郡の河辺桜美郷の附近藤崎村に、かつて平堂教院という大寺があつたがその後全く荒廢した。弘前城下の満藏寺はこの藤崎の故院を継いだものであるといひ、その鐘が今長勝寺に移つた」と述べられている。宮崎氏は、「この記念碑的存在ともいふべき鐘は、時頼が平等教院に寄進したも

の」(3論著)と同じ経路を述べられており、概説書7も同様である。ただ、小館氏は「平等教院↓靈台地↓護国寺↓万蔵寺」に寄進されたのではないかと推定されている(前掲10プリント)と云われているが、その根拠は、配布資料の性質上触れられていない。

津軽各地の郷土資料に疎い筆者としては、これらの所説に異を唱える論拠は何一つない。ただ、諸先学が一致して、藤崎の地にあった平等教院を想定されているにもかかわらず、その根拠は意外に詳らかでないこと、さらにこの「当寺」について余り考慮を払われていないことは、些か不思議な感を禁じ得ない。

「当寺」の具体名を知るための唯一の方法は、「住持」の徳熙なる人物を調べることであろう。

先にあげた円覚寺の大鐘に、この徳熙が、大耋旧・頭首・知事の次に位する西堂の、その六人の筆頭に名をのせていることはよく知られている。常識的には、かれが正安三年から嘉元四年と経過する内に、円覚寺の数ある僧侶のなかで昇進したのではないかと考えるのであるが、これは当たらない。『円覚寺史』(玉村竹二氏執筆)によれば、円覚寺の嘉元四年当時の住持は、一山一寧であった。

東大史料編纂所教授今枝愛真氏の教示によれば、徳熙は春容徳熙という人であり、蘭溪道隆の弟子の玉山徳璇の弟弟子であったという。

同氏の著書『中世禅宗史の研究』には、その第二章に「中世禅林機構の成立と展開」と題して、五山官寺機構の地域的展開を畿内および七道の別に従って列挙しているが、その陸奥国の項に、この玉山徳璇が開山であった暦応二年正月十七日以前に諸山に列せられている大禅寺なる寺院をあ

げている。その注記には、この寺の所在は未詳であるが、『禅尼集』によれば徳璇は同寺の開山で大覚派に属し、開山として入山する時の山門疏があるとされている。そして、同教授は、この當時を陸奥国の某所にあった大禅寺ではなかったか、徳熙は兄弟子の徳璇の嗣をうけて、大禅寺の住持となっていたのではないかとこの示唆を示された。今、筆者の能力を以てすると、『日本仏家人名辞書』にも載っていないこの春容徳熙なる禅僧の履歴・業績を詳らかにすることは出来ない。しかし、このような見解を紹介することによって、「嘉元鐘」のそもそもの寄進先が何処の何という寺院であったかの追求の道がもしも開けるならば、筆者にとってもまことに喜ばしい限りと云わざるを得ない。

大禅寺は、同氏著書中にも、その所在地は不明とある。陸奥国とは云っても、まことに地域は広大である。地元の研究者各位に何らかのヒントになるかも知れず、その示唆を得たいと思い、ここに一言した次第である。

要するに、「当寺」「徳熙」の二点に着目しても、今日の処、何ひとつ問題の解決には近づいていないことだけが判明した。しかし分らないことを分らないとすることも亦、決して無意味なことではない。

四 施錢檀那について

鐘銘に「施錢檀那」として名を遺す十五人(この数については後に一考を加える)の個別的検討は、この「嘉元鐘」の性格を考える上からも重要な課題であることは云うまでもない。宮崎・豊田両氏をはじめ

め先学は詳細に検討を加えていられるが、得宗領・得宗被官人の個別検証のみならず、得宗領の支配構造そのものを明らかにする上で重要な資料の一つたることから、当然といえば当然であろう。しかし、仔細に先学の述べる処を検討すれば、個々の人物のうち出自その他が明らかとなっているものについても若干の異見があり、また未だに何ものたるか分っていないものもある。以下順次に、検討を加えてみたい。

1 見阿弥陀仏

別掲成田氏稿(9)では、単に阿弥陀仏とのみあるが、拓本(10)によって、明らかに見字を見る。なお文献9は人名の配列が、原物と異なっている。

小館氏(10)は、この人物は、文永五年十月十九日付を以て、津軽鼻和郡大浦郷内、「くわん阿弥陀仏の屋敷一所他」を二宮女房に譲った大江光清譲状(新渡戸文書、『鎌倉遺文』一〇三一九号)に見える「くわん阿弥陀仏」と同一人ではないかと推定されている。「見」を「くわん」と訓むかという問題と、文永五年(一二六八)と嘉元四年(一一三〇六)とやや年代が隔っているという不安とがあるが、それ以上には明らかにできない。豊田・宮崎二氏は特別の記述をこの人物についてとはされていないようである。

2 沙弥道暁

元徳二年(一一三〇)十月一日付の茨城県潮来長勝寺の鐘銘に、「大施主下総五郎禅門道暁」がある(『神奈川県々史資料』二九三三号)。豊田氏(2)は、奥富氏論文(5)を示しつつこれについて述べているが、「鎌倉將軍家の御願所であった」長勝寺の鐘は、「大檀那

相模禪定門崇鑑」(高時)とし、道暁が大施主で、銘は円覚寺の清正叟(正澄)が作り、三十二人の結衆の名がある。この道暁と、「嘉元鐘」の道暁を同一人と決定する第三の史料は今の所ないが、有力な候補者たることを失なわない。

なお、『金沢文庫古文書』(『神奈川県史資料』一〇六八号)中に、徳治三年(一一三〇八)二月九日付の供料送進状があるが、某所(欠字のため不明)からの十余貫文送進者の二人のうち一人に「道暁」がある。送進状の道暁には花押があるので、今後の史料発見によっては一層、人物像は明らかとなろう。果して三人とも別人か、同一人物があるのか、現在の段階では、何とも云えない。

3 沙弥行也

豊田氏(2)は光也とするが(1)において行也としているから、黒植であろう。拓本によれば、明らかに行也である。人物像は、不明。

4 平高直

小館氏はこの人物を、大仏高直とされているが、論拠は不明。豊田宮崎氏は閑説せず。『尊卑分脈』や『統類従』所収の北条系図を電覧した所では、この人名を見出すことはできなかった。大仏氏には、元弘の段階で活躍する大仏陸奥守貞直があるが、高直は見当らない(『太平記』参照)。

5 安倍秀盛

宮崎氏(4)論文が、この人物を造鐘の中心と考えた平山氏論文(『東奥日報』掲載)に対する反論として成立したことは前述の通り。安東氏の一族で、豊田氏(1)も触れている。安倍—安東—曾我

各氏についての敘述が宮崎・豊田二氏の論著に詳しいので、本稿では省略する。

6 沙弥道性

建武元年（一三三四）の津輕降人注進状（「南部文書」）。『大日本史料』第六篇2、十一月十九日条所載）に見える曾我太郎兵衛入道道性と同一人と比定する。豊田・宮崎・小館氏とも一致しているが、その太郎兵衛入道を、宮崎氏は助光又はその子の太郎時忠とし、奥富氏は論文「鎌倉北条氏の族的性格」（森克己博士古稀記念『対外関係と政治文化』第二、古代中世篇所収）において、道性は大光寺系曾我氏の助光とされている。陸奥国の元弘・建武の間の持寄城の乱・大光寺合戦については、沼館氏の前掲著書（8）が歴史地理学上、古典的な価値が高いが、近年の研究の成果としてはこの奥富氏の論文が詳しい。

7 沙弥行心

豊田氏は論考（1）に於いて、行心とよみ、道性の前においており、（2）には行光としている。行心が正しく、後者は誤植と思われる。この人物については一切不明であるが、なお別の問題があるので後述する。

8 丹治宗員

豊田氏は（1）・（2）において、鹿角郡東根（十和田湖南方）にあった安保氏をあげている。武蔵七党の一の丹党に属する安保氏の本領は武蔵国賀美郡安保郷で、この安保氏に関わる文書は、一部は北九州市某氏、一部は横浜市立大学図書館に所蔵されている。また祇園社記録・八阪神社文書中にも関連文書がある。暦応二年（一三三九）九月

廿日、左衛門尉基員の讓状案（八阪神社文書）には、他の武蔵国二ヶ所・播磨国一所の所領とともに、「陸奥国鹿角郡東根内大里太郎在家・田山入道給分在家一字井田山郷」を「信阿讓状」とともに嫡子「くすはう」に讓っている。基員は成田を称しているが、それは武蔵国の本領安保郷の隣村成田郷を所領化していることに由来している。

伊藤一美氏は先掲論文6で、安保氏惣領家と成田氏系の系図・所領を表示している。それによれば成田家資の女が安保信員の妻であり、その跡の鹿角郡柴田村の地が文保二年（一一三八）十二月に孫の安保次郎行員（信阿）に讓られている。この信員・行員・基員の通字員に注目すれば、丹治宗員は、おそらく行員の兄か弟にあたるものと思われる。もともと伊藤氏は、信員の子と孫の二人を実名不詳の故か、空白とし、その孫の弟に行員をあてている。宗員を補うことがほぼ可能と思われる。

9 平経広

宮崎氏は（3）において、平高直・経広・道性・行心は曾我氏の一族と一括し、概説書7も同様である。その根拠は示していない。

10 源光氏

鼻和郡にあった源氏の一族で、中別所の正応元年七月廿三日付の板石塔婆の建立者と同じである。この人について、宮崎氏は（3）「この正応の建立のものは、光氏が亡父の五七日忌にあてゝ建てたもの」とし、他の板碑の在銘者源泰氏にある「高相郷主」に注目して、光氏らを高杉村近に居た家族と考えている。妥当な説といえよう。

11 僧証巖

12 沙弥道法

二人とも所見、所説なし。

13 藤原宗直

宮崎氏（3）は、「岩楯村が近衛家の荘園であつたらしいことと関係のある人物」とし、京都の領主と請所契約を結んだ北条氏（地頭）の代官が曾我氏で、岩楯村を含む平賀郷を支配したと考えておられる。一方、小館氏（10）は、この宗直を小河六郎二郎宗直（弘安十年の頃の人という）と推定されているが、根拠は不明である。

14 藤原宗氏

宮崎氏は13の宗直と併述していて、同族のものと見ているようであり、他の諸氏は関説していない。

15 沙弥覚性

所見、所説なし。

16 都寺僧良秀

これは肩書からみて、施銭檀郡の一人ではないが、便宜ここに触れる。宮崎氏の3及び概説書7は、福王寺と関係ある人物としている。しかし、先述した徳熙・「当寺」の問題と絡んで、津軽の人でない可能性も皆無とはいえない。いづれにせよ、徳熙・良秀・大工大夫入道の三人は、「当寺」と密接に関係するものとして、一括して共通条件を考えるべきではあるまいか。

以上、宮崎氏が（3）においてすでに喝破された「津軽の豪族や御家人層の構成・分布状況を示唆するもの」として価値の高い「施銭檀

那」について二三の卑見を述べたが、個別的探究はなお今後の課題として残されているといえよう。

五 刻銘「沙彌行心」について

寛政十二年春正月、松平樂翁定信の家臣広瀬典は主命をうけて編纂した「集古十種」の序文に「得庵寺古廟之遺、打摺若模写而増則片図隻字」と記した。その著は、明治四十一年一月、四冊に改装されて「国書刊行会」より出版された。その第二巻、鐘銘の部に、「嘉元鐘」の銘文が載っている。

「集古十種」の鐘銘が拓本なのか、模写なのかは、その序文あるいは再刊の序からも明らかにし得ない。ものによっては直接写したのもあつたであろうし、伝本に拠つたものもあろう。「嘉元鐘」の場合も何れとも断定し難いが、古本から写真版で複製した明治刊行のそれによると、拓本と見ても差支えないように思われる。

「鐘銘」七の部に三葉に分けて収められたものの冒頭に「陸奥国津軽弘前長勝禅寺鐘銘」と符箋が貼つてあるが、これが、寛政本そのものの符箋か否か、今明らかにし得ないが、この点は特に関係ない。

問題なのは、この「集古十種」に収めた「嘉元鐘」の銘文の中に、「沙弥行心」の名が見えないことである。

「施銭檀那」の部分省略すると、

施銭檀那見阿弥陀仏

沙弥道暁 沙弥行也

平 高直 安倍秀盛

沙弥道性

となっている。沙弥道性の下部は、陰刻のあとを白くうき上らせておらず、黒色のままである。ところが、今日伝わる長勝寺の「嘉元鐘」のこの部分には、明らかに「沙弥行心」と訓める四字が刻してある。

（なおもう一ヶ所のちがいを指摘するならば、前掲の一行目、檀那の那字から仏までの六字分の左側に、稍少しく字にかかって縦の線が今日のものには見出せるが、寛政段階のものにはない。これはあるいは何らかの偶然で生じた傷であるかも知れない。）

さて、「沙弥行心」の名が、もし寛政段階になかったとすれば（つまり『集古十種』のものを拓本と見倣して）、明らかにこの四字は追刻ということになる。現存する刻文の書体はともかく、彫りの深さや角度を仔細に検討するならば、他の部分とはちがった徴証を発見できるのかも知れない。

筆者はこの一文を草するに当り、本来現地に赴き、現物をあらためて点検し直さなくては考えた。しかし時間的余裕がなく、また天候上の条件を考えて、敢えてその肝心の作業を、今日まで実行していない。他日を期すところであるが、この疑問を卒直に呈示して識者の教示を得たいと思うのである。

むすびに代えて

以上、五つの項に分けて、「嘉元鐘」にまつわるいくつかの疑問点を紹介した。冒頭にも断ったように、参考とした文献は乏少であり、その吸収に当って先学の意図を誤って理解している惧れもなしとしな

い。したがって、あくまでこの一文は、論文などという名には値しない雑記帖、心覚え程度のものにすぎない。しかも、現地の研究者各位との交流もなく、全く遠隔の地の机上において限られた史料・文献のみを手がかりとしている。この点は、致命的な欠陥というべきであろう。しかし、それはそれとして、今後の津軽中世史の研究に、多少なりとも参考になればまことに幸いこの上もない。

執筆の機会を与えられた弘前大学国史研究会にあつく御礼を申し上げますとともに、是非、地元の方々の御叱正・御教示を乞うものである。擲筆に当り、学会の益々の発展と研究者各位の御清筆をはるかの地から祈る。

補注

宮崎氏は3論者で、嘉元鐘の寄進者を、時頼と貞時と二様に敘述している。貞時が正しく、時頼は誤記であろう。

（愛知大学教授）

（一九八〇・一・二五）